

歴史的景観を活かしたまちづくり

～千曲市稲荷山地区をモデルとして～

長野県千曲市 轟 純平



序章 研究の背景・目的

序一 1 研究の背景

地域の歴史的景観を活かしたまちづくりの取り組みは、日本各地で行われている。法に基づく取り組み、自治体の施策に基づく取り組みなど、そのアプローチはさまざまである。高度経済成長期における都市開発からの「保全」という形で始まった歴史的景観への働きかけは、今日ではより積極的に、景観を活用したまちづくりへとシフトしてきている。それを追認するかのように平成 20 年に「地域における歴史的風致維持及び向上に関する法律（通称「歴史まちづくり法」）」が制定された。歴史的景観とまちづくりは密接に関係するものとなっている。

本レポートの題材とする長野県千曲市稲荷山地区も、歴史的景観によるまちづくりの渦中にある町である。稲荷山は明治初期から大正までに商業地として栄えたが、現在では特出した産業も、観光の目玉となるようなスポットもなく、建造物のみが商都の名残を残した住宅街となっている。そんな静かな住宅地が、平成 26 年 12 月 10 日に、重要伝統的建造物群保存地区として選定を受けたのだ。長野県内で 6 番目の重伝建地区の誕生である。当然のことながら、稲荷山地区には重伝建選定により地域の賑わいが戻ってくるのだという期待感が広まっている。

筆者自身も稲荷山で育ち、現在もその景観を愛する者のひとりとして、歴史的景観を活かしたまちづくりを稲荷山に定着させ、地域の活性化に結び付けたい。そのような想いから歴史的景観を活かしたまちづくりというテーマを選択し、稲荷山の住民に対してまちづくりの指針を提案するために本レポートに着手した。

序一 2 研究の目的

本レポートは

- ①稲荷山地区の概要、景観とまちづくりに関する現状を分析、課題の洗い出し



図 1 重伝建選定に高まる地域の期待

- ②歴史的景観によるまちづくりに必要な要素を抽出
 - ③稲荷山地区の歴史的景観まちづくりに対する住民への提案を導く
- という3点の達成を目的とする。

レポートのフローは図2の通りである。

まず、第1章では稲荷山地区の概要を説明し、稲荷山地区の景観とまちづくりに関する分析を、筆者自身のまち歩き体験とまちづくり関係者へのヒアリングなどから行い、地域の抱える課題を明らかにする。

第2章で、景観とまちづくり一般に関する文献、研究などから歴史的景観とまちづくりに関する考え方を整理し、歴史的景観を活かしたまちづくりに必要な要素を仮定として抽出する。

第3章では歴史的景観を活かしたまちづくりの先進事例として、高知県香南市赤岡町の取り組みを取り上げ、第2章で抽出した歴史的景観を活かしたまちづくりの要素を検証する。

そして最後に、第4章で提示したモデルをもとに、稲荷山の今後のまちづくりに関する提案を行うこととする。

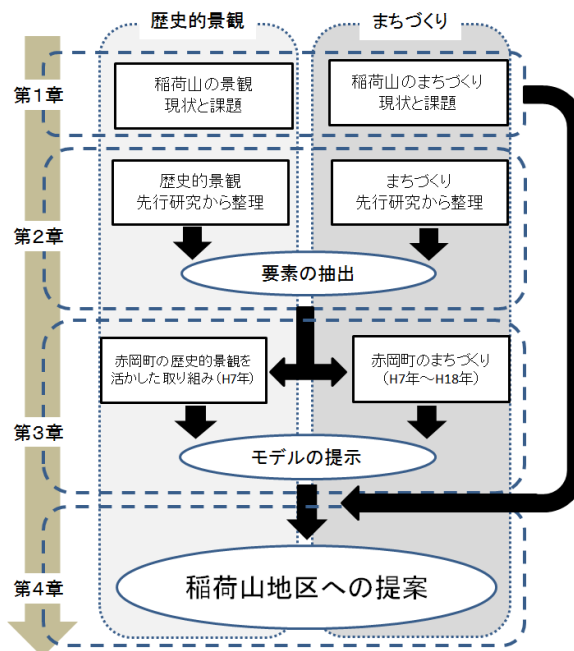


図2 本レポートのフロー

第1章 稲荷山地区の分析・課題抽出

1-1 稲荷山の概要

稲荷山の歴史は天正十年（1582年）に稲荷山城が築城されたことに端を発する。その後も善光寺道の宿場町として栄えていく一方で、長野県北部の物資輸送上の要衝として商業地としての地位も獲得していた。

1847年に長野県近郊を襲った大地震によって稲荷山の景観は壊滅的な損害を被ったが、宿場町としての収入を元に復興を遂げた。現在の稲荷山を代表する景観は、この「善光寺地震」後の復興により形成された幕末から昭和初期の商家町としての風景である。

メインストリートは昭和初期までに形成された、歴史的に幅のある景観で、裏通りは蔵が連なるノスタルジックな景観を形成している。重伝建として選定を受けたのはこの周辺地区である。鉄道が稲荷山を離れて敷かれたことを契機に卸問屋としての生業は既に途絶え、今では商家の子孫が歴史的建物の中で居住する閑静な住宅地となっている。

一方で重伝建地区周辺の田畑は開発が進み、昔の稲荷山の歴史や文化を知らない住民も徐々に増えている。

1-2 稲荷山の景観の現状と課題

すでに述べたとおり、稲荷山の伝統的建造物はその多くが明治期から昭和初期にかけての商家町であった時代のものである。表通りには店舗が軒をそろえて並び、裏通りからは土壁や漆喰塗の蔵が見える。

平成 25 年に伝統的建造物群保存対策事業の一環として行われた悉皆調査によると、現在稲荷山の伝建地区に残る伝統的建造物

(住宅・門・倉庫・蔵等) は約 230 棟とされている。これ以前の数字については明確な記録が残されていないが、昔からの住民からの聞き取りによると、伝統的な建物が数多く取り壊され、20 年前の半数以下になってしまっているということである。

かろうじてその形を残す建造物に関しても、周囲の景観とマッチしない場当たりの修復が施され、地域全体の景観価値を減じている(写真 2)。

建造物を取り壊された後においても、その跡地は整備されずに荒れたままの空き地として放置されることが多い。

稲荷山地区の景観は、伝統的建造物の安易な補修と、伝統的建造物の減少、それに伴う不体裁な空き地の増加により、その価値を著しく減じている。

重伝建の選定を機に景観回復の試みは進んでいくと思われるが、これまで住民が一体となった保全運動が立ち上がらなかったことに注意すべきであろう。稲荷山の景観の現状を分析していくと、

- ・歴史的建造物の荒廃
 - ・自分たちの暮らしてきた景観への関心の低さ
- という課題があげられる。

1-3 稲荷山のまちづくりの現状と課題

現在稲荷山で歴史的景観をテーマにしたまちづくりに携わっている組織は「稲荷山町・くらしと心を育む会」「稲荷山まちなみ委員会」という二団体である。

「くらしと心を育む会」は、地元の有力者が立ち上げた団体であり、比較的年齢層が高めの地元住民で構成されている。「まちなみ委員会」は、地元建築士を中心に、若い地域住民で活動する団体である。どちらの団体も稲荷山地区の重伝建選定に向けた認知度向上活動や、荒廃する歴史的建造物の修復により再活用するなど、着実に実績をあげている。両



写真 1 昭和初期の稲荷山

出典：稲荷山ウォーキングガイド



写真 2 トタンで修復された蔵

者は歴史的景観に特化したテーマ型コミュニティと言えるが、「くらしと心を育む会」の代表者に聞き取りを行ったところ、活動の協力や意見交換などは行われていないとのことである。

まちづくりの方向性に関して住民全体で共有するための場所が設けられてこなかったが、平成 24 年に市が主催のワークショップが 4 回行われ、住民に広くワークショップ参加の呼びかけが行われた。当時の資料に残された参加者の声からは、新鮮な視点で稲荷山を見据え、地域の将来像に関して様々な意見の交換が行われた様子が見て取れる。ワークショップはまちづくりに一定の成果を残したが、今後の継続は予定されておらず、その成果も公開されていない。

以上のことから、稲荷山のまちづくりに関する課題は以下のとおりである。

- ・まちづくりのコミュニティの連携不足
- ・地域住民全体に稲荷山の将来像が共有されていない

第 2 章 歴史的景観とまちづくりの整理

2-1 歴史的景観

歴史的景観はまちづくりを進めるうえで、どのように活用することが求められるのか。

景観について辞書を紐解くと、「①風景外観。けしき。ながめ。また、その美しさ。②自然と人間界のこととが入りまじっている現実のさま」（『広辞苑』855 頁）という説明がなされ、その対象はあくまでハード、視覚的に表れてくるものこそが景観であるという趣旨が述べられている。

一説には景観という言葉はドイツに植物学を学んだ三好学氏が、ドイツ語の *Landschaft* の訳として日本に持ち込んだとされている。その当時において景観は自然的、視覚的なものであったのだろう。ただし、景観という概念はその後、地理学者の辻村太郎氏により人文地理学に取り込まれ、その意味合いを変えていく。辻村氏は「景観はその風景を構成している多数の要素を分析・考察したうえで、あらためて組み立てた総合像である」と述べてい

る。この見解は卓見であり、混同されがちである風景と景観の差異を見事に表しているだろう。すなわち、景観という表現を用いる際は、視覚的な事象にのみとらわれず、様々な自然的・文化的・歴史的・技術的背景を含めた全体的な存在を表す概念であることを忘れてはならない。都市計画学者である後藤春彦氏は同様の視点から、「景観」＝「地域」＋「風景」であると定義しており、今日における景観概念を的確に示した図式であるといえる。

景観の概念を以上の理解によって考えると、歴史的景観を捉える上で重要な要素は、古くからある風景そのものよりも、それが長年かけて培われてきた地域性にあることになる。

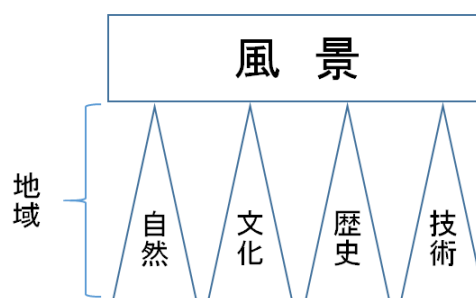


図3 景観を表す図
筆者作成

歴史的景観を活かしたまちづくり事例の一つとして、愛知県足助町（現豊田市）の取り組みがあげられる。足助町の歴史的景観のまちづくりは 1973 年に町民憲章として「保全を開発と信ずるまち」を掲げ、1980 年に明治時代の庄屋屋敷を再現した「三州足助屋敷」という体験型観光施設を建設した。これは一見すると行政によるハコモノ施策として、全国の失敗例と同じ道を辿るかに思えるが、足助屋敷は開館以来、多くの観光客を誘引し、地域経済を牽引してきた。また、足助地域は平成 17 年の豊田市との合併以降も、住民中心の活気ある地域づくりを展開している。多くの自治体がハコモノ施策による失敗と、合併による地域活力の低下を経験する中で、足助地域が今もなお多くの人を惹きつけ、長きに渡る地域づくりを継続できているのは何故なのか。

足助屋敷は地元大工と職人が、地元の材木を使い、明治の庄屋屋敷を当時の技術で再現して完成した建造物である。また、足助屋敷は来館者に山里文化を体験させるだけではなく、足助町が忘れかけていた山里の生きた暮らしを動態保存する民俗資料館でもある。足助屋敷とはまさしく、足助町の自然的、文化的、歴史的、技術的な背景をすべて表しているのだろう。

このように考えると、歴史的景観を単なる観光資源とせず、まちづくりと上手くリンクさせるためには、目に見える風景のみならず、景観を形成する自然・歴史・文化・技術を総合した地域性を掘り起こす作業が必要なのではないか。

2-2 まちづくり

続いて、まちづくりという概念の整理に移る。

「まちづくり」という単語は、国や自治体の部署の名前としても使われるほどに一般的な存在となっているが、その使われ方は場合によって大きく異なる。本レポートでは、まちづくりを、住民自身がまちの将来を考え、地域資源の有効活用によって地域活力を取り戻す、「地域再生的まちづくり」に限定して論じたい。

地域再生的まちづくりは各地で行われるが、その中の幾つかは残念ながら一時的な観光収益の増加で終わってしまう場合があることは否定出来ない。地域再生的なまちづくりの取り組みを、持続的に成功させるためのキーポイントは有るのだろうか。

そもそも地域再生的まちづくりが、かつての地域活力を取り戻すものであるとすれば、昔の活力がどのように形成されてきたのか考えるに、戦前の日本で行われてきたまちづくりは、地域の大地主や大商店の店主などの旦那衆が中核を担ってきた。それはある意味で、「まちづくり」というよりは、「まち経営」に近いものであったのだろう。価値観の多様化した現代社会で、戦前のような「地域のカリスマ」によるまちづくりの牽引を期待することは現実的ではない。しかし、「まちを経営する」という、民間的・戦略的な視点は現代にも通じるものが有るのではないか。そう考えて、まちづくり成功事例を俯瞰すると（「月刊地域づくり 283 号～305 号」を参考とした）、共通するまちづくりのプロセスが見いだせてくる。

・地域再生的まちづくりの第一歩は、市民の自発的なまちづくり運動から始まる。今そこにある地域の問題に向き合ううちに、地域全体の将来像を共有し、舵取りを行うコミュ

ニティに成長する。まちに対する責任感を持つ、まちづくりの「ヒト」が誕生する。

・地域全体の将来像を共有するコミュニティにより、今まで価値を見いだせなかった地域資源に価値が見出され、新たなまちづくり活動が生まれる。まちづくりの資源たる「モノ」の生産といえる。

・新たなまちづくりの活動によって得られた成果を見える結果として表現し、対価としてまちづくり活動の継続のための「カネ」とする。この「カネ」が次のまちづくりのための資金となる。

以上の「まち経営感覚」を伴ったまちづくりのプロセスは、現代におけるまちづくりにも通用するように思われる。

しかし、現代のまちづくりが戦前のまち経営と異なるのは、全ての経営資源をどのように運用するかを決定するのは一人のカリスマではなく、多様な価値観を持つ無数の地域住民であるという点にあるといえる。だとすると、現代における地域再生的まちづくりは、

・「ヒト」「モノ」「カネ」の情報を地域住民に広く共有するための制度設計や、ネットワークの構築が必要であるといえる。

という一点を加える事で現代に通用可能なまちづくりとなろう。

本章で得られた結論をまとめると、

①景観を形成する地域性の掘り起こし②自発的まちづくりから生まれるコミュニティ（ヒト）③新たな地域資源の発見（モノ）④地域資源から得られる自主財源（カネ）⑤情報を共有する仕組みやネットワーク

以上の5点が歴史的景観によるまちづくりを成功させる要素であると仮定し、次章の分析に移る。

第3章 先進事例の紹介・分析

本章では第2章での概念整理によって得られた「歴史的景観を活かしたまちづくり」に必要なと思われる要素を、実際の先進事例の分析により実証する。

先進事例には筆者が先駆地として実際に視察を行った、高知県香南市の赤岡町における取り組みを採用した。

3-1 赤岡町の概要

赤岡町は高知県の中央に位置する海辺の町であり、平成18年に合併して香南市となるまでは、全国で最も面積の小さい町で、人口も3,000人強という小規模な自治体であった。

江戸時代には地域随一の商都として発展し、幕末には各町内の旦那衆がその財力を背景として歌舞伎絵師・弘瀬金蔵（通称『絵金』）を庇護し、現在も絵金の描いた屏風絵が地域の宝として保存されている。

赤岡町は後述する「絵金祭り」で全国的に有名なまちであると同時に、平成5年ころから20年以上、住民主体のまちづくりを継続し、地域活力を取り戻している事例として注目され続けてきた。

3-2 赤岡町を事例とした要素の検証

要素① 景観を形成する地域性の掘り起こし

絵金祭りは、赤岡町のメインストリートに連なる町屋の軒先に、絵金屏風 23 点を展示し、夏の夜空の中、蝋燭の灯りのみで鑑賞するものである。

赤岡町の歴史的景観は、水切り瓦を多数使用した土蔵と、厨子二階を有する町家という土佐の典型的な江戸末期から明治期の商都の歴史を有するものである。これらの景観が営まれてきた生業は現在の赤岡町では途絶えてしまっているが、その景観は、絵金の屏風絵と、闇深い夜という赤岡町の文化と自然が繋がることで価値を高めている。

要素② 自発的まちづくりから生まれるコミュニティ（ヒト）

絵金祭りを起点として地域の見直しが進められ、平成 5 年ころから様々なまちづくり活動が始まった。「土佐絵金歌舞伎伝承会」や、「やつゆ会金木犀」は、絵金祭りによって地域へのアイデンティティを呼び起こされた地域住民が立ち上げたものである。さらには、町の住民だけではなく近隣の学生などがこうしたコミュニティの動きに引き寄せられるように、まちづくりに参加していったことは注目すべき点としてあげられる。これらの団体は今日においても、赤岡町のまちづくりの中心となって継続して活動を行っている。

要素③ 新たな地域資源の発見（モノ）

平成 9 年には赤岡町が一体となったまちづくりワークショップが開催された。それまでバラバラに活動していたコミュニティの面々が顔を合わせ、まちの魅力と問題点を共有していく。その過程で彼らは赤岡町に絵金だけではない、様々な魅力を発見する。地域に住む元気なお年寄りをはじめ、今まで地域の住民すら忘れていた、廃業した銭湯の空き家や、今は使われていない米蔵といったものが新たな地域資源として見出されてきたのである。

このような地域資源を活用したまちづくりによって、赤岡町は活力を高めていった。

要素④ 地域資源から得られる自主財源（カネ）

赤岡町のシンボルとも言える絵金屏風絵は現在、「絵金蔵」という美術館に収蔵されているが、これは住民のワークショップにより生まれたものである。地域コミュニティの場であった米の蔵を再利用することを住民たちが提案し、実現に漕ぎつけたものである。絵金蔵は現在、住民が組織する絵金蔵運営委員会が指定管理を受け、指定管理料がまちづくりに活かされている。

また、赤岡町のまちづくりでは、自分たちのまちづくりの成果を書籍として発行し、この売上で景観を保全するという取り組みも行われている。これも「まちづくり」という行為そのものを地域資源と捉えた自主財源の確保といえるだろう。

要素⑤ 情報を共有する仕組みやネットワーク

赤岡町のまちづくりの特徴は、非常に頻繁に、長年に渡り続けられたワークショップにある。開催場所に、地域住民の思い出がたくさん詰まった銭湯を用いるなど、住民が参加しやすい工夫が凝らされていた。これまでのまちづくりの中で発見された、地域資源などの情報が広く共有されていた。

以上、赤岡町の事例から、①から⑤の要素を組み込んだ歴史的景観によるまちづくりが地域の活性化に有効であることがわかった。

3-3 赤岡町を元にしたモデル

これまで紹介した赤岡町の取り組みは、近代化により活力を失いつつ有った地域が、その地域性が見直されることで持続可能なまちづくりに発展するというオーソドックスな歴史的景観を活かしたまちづくりの姿である。その試みから歴史的景観まちづくり一般に通用する汎用性を抽出すると以下のとおりである。

(1) 古物を活かしたイベントによる地域性の掘り起こし

歴史的景観を形成してきた地域性に目を向け、掘り起こす作業が必要である。特に歴史的景観と密接に関係する古物を用いた分かりやすいイベントが望ましい。イベントによって歴史的景観に興味が生じ、まちづくりに関わるコミュニティの発生も期待される。

(2) 地域の記憶が残る建造物を核とした未来像・情報の共有

地域の未来像を共有し、ボトムアップ的な合意形成を促す場としてワークショップの手法が一般的に用いられるが、自由な意見交換になるような工夫が必要である。歴史的景観のある地域であれば、地域住民が気兼ねない交流をしてきた記憶が眠る場所を使うことが、効果的である。

(3) まちづくりの成果を景観として表現する

まちづくりの成果を歴史的景観の中に表現することで、景観は新たに自分たちのまちづくり活動のアイデンティティとしての価値を有することとなる。

景観として表現されたまちづくりはストーリーが明確なものとなることで、寄付や投資のインセンティブを得る。指定管理などの選定も受けやすくなり、身の丈にあった、まちづくりの資金の獲得が期待できる。

上記は歴史的景観を活かしたまちづくりを成功させる上での共通要素と言えよう。

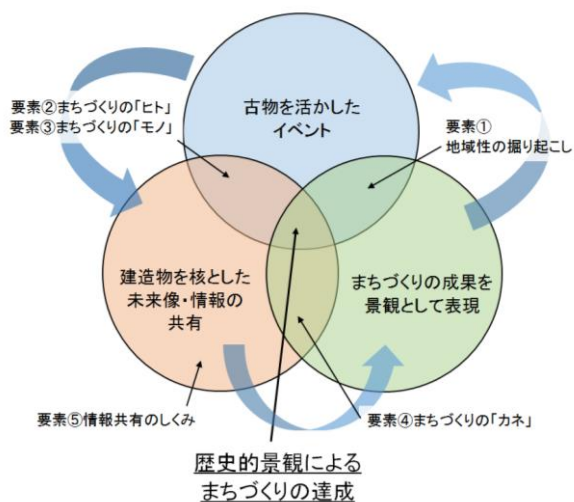


図4 歴史的景観まちづくりのモデル

第4章 稲荷山の歴史的景観まちづくりへの提案

4-1 稲荷山祇園祭に商都の営みを復活させる

(古物を活かしたイベントによる地域性の掘り起こし)

稲荷山の歴史的景観を形作っている地域性とは、幕末から昭和初期の商家の歴史・文化である。既にその生業が絶えてしまっている建造物に景観の価値を復活させるため、稲荷山の景観とともに歩んできた古物を活かしたイベントを提案する。

現在稲荷山には、市に寄贈された昔の商家を修復し、かつての商家の暮らしの道具を収蔵する「稲荷山宿蔵し館」(資料館)が存在する。蔵し館の中にはかつて商人が生業や暮らしの中で使用していた商売道具、看板、生活の道具などが寄付品 322 点、寄託品 265 点が展示・保存されている。これらの道具は絵金の屏風絵のような美術的価値を有するものではないが、稲荷山の商家としての地域性を呼び起こすための要素であると言える。稲荷山の住民も忘れかけているこ



写真 3 蔵し館に眠る道具類

れらの道具類を、町並みの中に昔の姿のまま復活させることで、まちの持つ歴史的景観の価値が再発見され、住民の景観への無関心という課題の解決が期待できる。

稲荷山のまちづくり地縁組織である「まちづくり推進会議」が運営に深く携わる祇園祭にイベントの開催を合わせ、「くらしと心を育む会」「まちなみ委員会」というテーマ型組織が協力することで、各団体がまちづくりに関して同じ方向を向き、まちづくり団体間のコミュニケーションの不足という課題解決も図りたい。

「くらしと心を育む会」の構成員は地域に昔から住む人が中心であり、まちの歴史や昔ながらの道具に詳しい。「まちなみ委員会」は若年層や稲荷山地区以外のメンバーも居るので、労働力の提供や情報発信に長けている。相互の補完的關係が期待できるはずだ。今まで連携していなかった各団体を急に連携させることは困難ではあるが、各団体の性質やメンバーの個性を知る行政が根気強く調整することで可能となろう。

4-2 稲荷山まちづくりワークショップの長期的開催

(地域の記憶が残る建造物を核とした未来像・情報の共有)

稲荷山では住民のつぶやきを拾い上げるワークショップの機会が過去数回しか行われておらず、住民の合意形成が不十分である。そこで、ワークショップの継続的な開催を提案したい。祇園祭におけるイベントの開催が2～3年以内を目処とする短期的な計画であるとすれば、ワークショップは、より長期的な視点が必要となる。

会場は稲荷山の空き店舗など、地域住民が交流を行ってきた場所とする。既にいくつかの空き店舗は既存のまちづくり活動の中で、フリースペースとして利用可能になっており、これらを使用することは容易で、会場代もかからない。

何度も継続していく中で、随時新しい参加者を取り込む工夫をする必要がある。私が差し当たって提案したいのは近隣大学のゼミ・研究室をワークショップの参加者に組み込むことである。大学生はまちづくりに必要と言われる「若者」「よそ者」という要素を兼ね備えている。また、研究室としてワークショップに参加してもらえるのであれば、その成果は研究成果として保存されるので、いずれこれまでのまちづくりを振り返る必要ができたときにも有益である。幸いにも過去のワークショップで信州大学との研究室と面識ができていたので、参加を願いやすいはずだ。地域住民全体に稲荷山の将来像が共有されていな

いという問題点の解消を目指す。

4-3 稲荷山風土レストランの開業

(まちづくりの成果を景観に表現させる)

稲荷山には現在郷土料理を食べることの出来る店舗などがなく、観光客の声にも「稲荷山でしか食べられないものを食べたい」という言葉を多く聞く。稲荷山独自の食べ物が何かと聞かれた時、即座に答えられる住民は少ないように思われる。筆者も残念ながら思い浮かぶものがない。

食はすべての源とも言われる生活の基礎であり、間違いなく景観に影響を与える地域性といえる。食という地域性に関して、稲荷山の独自性が存在しないということは考え難く、これは地域性が埋没しているという事にほかならない。今後まちづくりが進んでいくうちに、稲荷山独自の食文化が掘り起こされていくと思われる。この食文化を景観として表現するものが、稲荷山風土レストランである。

経営は、まちづくりに携わってきた団体の努力に期待したい。

歴史的建造物が数多く放置されている現状を考えると、新しい建造物を建てるよりも、これら建造物を所有者の同意を得て譲り受けるか、もしくは借り受けて改修し、再利用することが時代の流れに沿っているように思われる。

ただのレストランとして運営するのではなく、まちづくりの情報を店内外に掲示し、稲荷山のまちづくりの記録を積極的に市外にも発信することで、稲荷山のまちづくりにファンを増やす。稲荷山まちづくりに関わるコミュニティへの寄付メニューを組み込むことで、まちづくりの過程そのものが今後の活動資金となる。コミュニティ間の競争意識も高まり、稲荷山のまちづくり機運が高まっていくことも期待される。

完成したレストランは自分たちのまちづくりを景観に表現したものとして誇れるものとなろう。

4-4 終わりに

以上わたしは稲荷山の歴史的景観によるまちづくりを進めるため、そもそも歴史的景観によるまちづくりとは何かという整理から、先進事例を学び、稲荷山の課題を克服するまちづくりの提案を示した。

本レポートは今までの稲荷山のまちづくりを否定するものではなく、その成果を大いに評価し、今後の取り組みに少しでも力を貸したいとの思いで作られた。本文の中で稲荷山の現状と課題について、否定的な言葉を重ねたが、それは私の稲荷山に対する愛情の裏返しとあっていただきたい。

最後に、本レポートを作成するにあたって御指導、御助言をいただいた後藤春彦主任講師をはじめ全ての皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

〈参考・引用文献、ホームページ等〉（URL は平成 26 年 12 月 25 日現在）

- ・後藤春彦 『景観まちづくり論』（2007） 学芸出版社
- ・西村幸夫 編 『まちづくり学』（2007） 朝倉書店
- ・後藤春彦 監修 『まちづくり批評』（2000） ㈱ビオシティ
- ・長野県千曲市教育委員会 『更科稲荷山—伝統的建造物群保存対策調査報告書—』（2013）
- ・『稲荷山四百年の歩み』 郷土歴史「稲荷山四百年のあゆみ」編纂出版委員会
- ・絵金蔵 公式ホームページ (<http://www.ekingura.com/>)
- ・月刊地域づくり（172 号）
(<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/book/monthly/0310/index.htm>)